2003（平成15）年12月

AICHI UNIVERSITY LIBRARY COMMUNICATIONS 2003. 12

韋編（いへん）

愛知大学図書館報

No. 28

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

ミュンヘンの修復士

副学長　海老澤　善　一

九月中旬、私はバイエルン州立図書館の「写本・稀覯本修復研究所」にいるシュスター–石井律子さんを訪ね、修復の作業を見せていただいた。彼女が今修復中の本は、九世紀から書き継がれ1479年に完成した、「ロールシュの死者の書Lorscher Totenbuch」と呼ばれる、芯の板を豚革で包んだ表紙の、ペルガメント（羊皮紙）の、ラテン語の手写本である。「死者の書」は今日の作業を終えて木の万力で締められ、背に砂袋を負い形を整えられて休んでいたが（写真右）、律子さんは万力を外し「本のゆりかごBuchwiege」に載せて中を開いて見せてくれた（写真次ページ）。開きすぎると裂ける恐れがあるので、修復作業は赤ちゃんを扱うように優しくゆりかごに寝かせて行うのである。

修復は必ずパートナーと二人組みで行われる。パートナーは修復前の写本の記録を取り、修復個所を指定し、修復後は記録と比較して、作業結果を判定する。ただし作業そのものはあくまでも一人の責任でなされる。「死者の書」は40ヶ所の修復個所を指摘され、すでに作業は二ヶ月かかっているという。羊皮紙が欠けている部分は、その大きさの羊皮紙を作り、紙の色に合った染料で染め、蝶鮫の浮き袋から作った糊（Hausenblaselein、にべ膠のようなもの）で貼り合わせる。鍵裂けは、骨粉をホルマリン処理してタンパク質を繊維結合させて、幅数ミリの細い短冊状の紙を作り、それを裂けた部分の上に丁寧に貼る。下の文字が読めねばならないから、紙はごく薄いもので、私は補修には全く気づかなかった。表紙の木の欠損個所は麻の粉をペースト状にした糊で埋めていく。折りのぐらぐらは、麻を撚って通した花切れで補強す

万力の中で休む「死者の書」

る。背の痛みは不織布で仮に接着しておき、豚革で補修する。

紙本の場合はすべて和紙で補修する。修復室の隣りには紙漉場があり、楮30％、三椏70％の和紙が作られている。これは下の文字が透き通るほど薄いもので、濃淡の縞模様をつけて漉いてある。繊維の足を出すために、淡い部分に添って手でちぎって使うのである。

仕事を終えた律子さんとフライハイトの酒場でヴァイスビーア3杯とシュナプス2杯を飲んだ（彼女は酒豪である）。彼女は関西の芸大でグラフィックデザインを勉強した。お父さんが製本屋さんで、工芸製本も手がけていたから、自然と製本に惹かれた。しかし工芸製本は機械を導入し人を雇って工房化しなければならない。修復ならば一人でもできる。それに何百年も保つ素材への愛着、信頼感もある。しかし日本では修復技術を習うことができないので、27歳の時、オーストリアに渡って徒弟になった。三年で職人Geselleになり、一年のお礼奉公の時、自分の製本をバイエルン州立図書館に持参し、買い上げて貰い、修復本も見せたところ、その年に州立図書館に設置された「修復アカデミー」を紹介され、その第一期生となった。そして修復士Staatlich-Geprüfter Restauratorの資格を取って、1994年からこの研究所で働いているのである。

本のゆりかご　Buchwiege

律子さんは、修復の仕事は「実存的だ」と表現する。修復という作業が博物館のガラスケースに飾られるような芸術品を相手にするものではなく、実際に使用される生きたものを相手にするということであろう。最近は、書籍のマイクロフィッシュ化や電子媒体化が積極的に押し進められているが、本は単にフィルムに定着される影や電子媒体に解消されるものとは思われない。本にはそれぞれ固有の重さと特有の手触りがある。私は決して本を眺めて楽しむ愛書家ではないが、文庫本一冊にも個性を感じる。本は生き物であり、その存在感はマイクロフィッシュやインターネットの画面からは感じられない。本を開いたときのインキの臭い、そこから小宇宙が広がり、未知のものを探索する喜びが生まれるのである。

私は、古い物をただ忠実に再現するだけの修復に創造性があるだろうかと、意地悪な質問をしてみた。律子さんの答えは単純明快だった。彼女は「創造」という言葉の擬物性を直感しているのだろう、創造は近代以後の観念で、主観的印象の表現にすぎないと言った。創造というものは往々にしてオブジェの持つ存在の豊かさをとらえ損なうのである。

最後に、律子さんは自分がドイツで暮らしていることについて語った。日本人であること、ドイツにいること、この「ある」や「いる」には意味がない、重要なことは何を「する」かである。ところが、日本では「ある」や「いる」のみで人を判断し、そこから権威や上下の関係が生まれてしまう、と。ミュンヘンはそろそろ初冬の気配で、コートの襟を立てて彼女は闇の中に消えていった。

文字の歴史と図書館

―古代日本の文字文化と「図書寮」―

文学部教授　和　田　明　美

元来、日本人は文字を持たない民族でした。少なくとも七～八世紀まで、日本には独自の文字体系はなく、主に漢字・漢文によって表記していたようです。では、日本語を表すための文字は、いつ頃から使用されはじめたのでしょうか。また、いかにして日本の文字文化が生まれ、どのような過程を経て今日に至ったのでしょうか。通説に従うならば、日本における文字の歴史は五・六世紀から、文字文化の歴史の幕開けは七・八世紀からということになります。

文字文化の低迷期とも言うべき昨今、若者の活字離れが叫ばれ、書物に親しむ機会も激減しつつあります。そのことを端的に表しているのが、読者層の中高年化の現象ではないかと思われます。日本語への関心の高まりとともに、この数年、日本語関係の著書（新書や単行本）が数冊出版され、中にはベストセラーになる本も見られます。しかし、主たる読者層は、残念ながら二十代ではありません。当初、出版社がターゲットとした読者は、大学生を中心とする若者であったようですが、実際にそれらを愛読しているのは、五十代もしくはそれ以上の年代層なのです。

メディア情報の発達とともに、文字（活字）文化の陰は薄くなってきましたが、私たちにとって文字は今日なお身近な存在です。否、文字が表現と伝達・理解における必須の媒体であることに、何ら変わりはありません。そこで、原点に立ち戻り、日本語の文字の歴史と、文字によって表された書物の蒐集・保管・閲覧等、古代日本における図書制度（図書寮）が果たした役割について述べたいと思います。

日本に漢字が伝来したのは、三・四世紀頃とされています。その音や訓を巧みに生かしつつ、やがて日本人は日本語を表すための「万葉仮名」を生み出します。五世紀前後から、まず人名や地名等の固有名詞を音仮名によって表す試みがなされ、ついで訓仮名も使用されるようになりました。数百年をかけて、日本人は、徐々に「万葉仮名」による表記体系を整えていったのです。『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』等の文献資料によるならば、日本における文字の歴史は千数百年ということになります。中国の文字の歴史が、殷代の甲骨文字まで遡るのに対して、日本においては、最も古いものでも五世紀前半の金石文とされる『稲荷山古墳鉄剣銘』、五世紀後半の『江田船山古墳太刀銘』等までであり、その歴史は未だ千五・六百年程度に過ぎません。

平安時代になると「万葉仮名」をくずし、連綿と続けて書く「草仮名」が生まれます。このような字体が成立する背景には、直線よりも流れるような曲線美、堅さよりもやわらかさを好む日本人の美意識と価値観があると思われます。「草仮名」が「平仮名」を生み出す母胎となったことについては、もはや説明を要さないでしょう。「平仮名」は、特定の個人の手によって一度に成ったものではありません。すなわち「平仮名」は、日本的な発想に支えられた創造物であり、文字の簡略化と単純化をはかりつつ書き記そうとした筆記者たちの、たゆまぬ努力を通して成立した日本独自の文字体系なのです。

九世紀末から十世紀にかけて成立した「平

仮名」は、「男手（万葉仮名）」に対して、「女手」とも称されます。平安時代、『古今集』が「平仮名」を用いて撰集されたことを皮切りに、勅撰集や私撰集が次々と編まれました。また、『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』等の物語、さらに、『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』等の女流日記文学も、「平仮名」によって表されました。「平仮名」という文字媒体が存在しなければ、あるいはこれらの作品は生まれなかったのかもしれません。このようにして、「平仮名」は、みやびな王朝文化のもとで、流麗な平安和文を生み出していったのです。

一方、「片仮名」は、九世紀はじめ頃から僧侶を中心に、主として漢文訓読において使用されはじめました。「平仮名」と同様に「片仮名」も、「万葉仮名」を簡略にしたものである点では同様です。しかし、速記の便による「万葉仮名」のはじめか終わりの省略文字である点で、「片仮名」は「平仮名」とは異なります。両者は、使用目的も用いる階層も異なっており、それぞれの必要性に基づいて、独自に発達したことは注目に値します。やがて「片仮名」も、漢文訓読という枠を超えて、広範に使用されるようになります。『色葉字類抄』等の古辞書や説話、軍記物語が、漢字を交えた「片仮名」によって書かれました。「片仮名」を使用したのは、主として僧侶や漢学者でしたが、広く庶民が使用したのもまた「片仮名」でした。

第二次世界大戦後、国語改革が行われるまでは、「片仮名交じり文」の使用頻度が、「平仮名交じり文」のそれよりも高かったことは周知の通りです。今日では、「平仮名」も「片仮名」も、一音節を特定の一字で表し、それぞれの字源も概ね一字です。これは、一九〇〇年の「小学校令施行規則改正」によって定められた結果であって、それ以前は両者とも固定的ではありませんでした。例えば、平仮名「あ」は「安・阿・愛・悪」、「き」は「幾・支・起・貴」を字源とし、一方、片仮名「ア」は「阿・安」、「キ」は「幾・支・岐・木・寸」によって表されてきたのです。

ところで、日本における図書館の歴史は、どこまで遡ることができるのでしょうか。書物は文字文化の所産であり、文化的な国家は、いずれも古くから自国および他国の書物の蒐集・保管に努めてきました。古代日本における図書制度は、大宝・養老令以来、律令制度によって保証され、漢籍はもとより自国の書物の蒐集・保管・書写等を行うべく、国家機構の中に位置づけられたのです。『令義解』巻一「職員令」には、次のように記されています。「図書寮頭一人。経籍・図書・国史ヲ撰修シ、内典・仏像・宮内ノ礼仏・校写・装潢・功程・紙筆墨ヲ給フ事ヲ掌ル」。

中務省に属する「図書寮（ずしょりょう）」は、「大学寮」とともに、奈良時代から平安時代にかけての律令制度のもとで、古代日本の学問や文化の枢要としての機能を果たしたようです。公的な「図書寮」の一方で、寺院も仏典を中心とする書物の蒐集・保管・書写に努めてきました。貴族や武家もまた、みずからの「文庫」の充実をはかり、貴重な文化遺産の保管や書写に寄与してきたのです。

中国書を中心に和洋書すべて一三七万冊、雑誌一三〇〇〇冊を誇る愛知大学図書館は、伝統的な「図書寮」や「文庫」の一側面を備えていると言えるでしょう。愛知大学図書館の蔵書数は他にまさるとも劣ることはなく、システムも年々整備されつつあります。今後とも、愛知大学における知の枢要としての機能を果たしてゆくはずです。現在問われているのは、いかにして現代の学生や教職員さらには地域社会のニーズに応え、二一世紀の高度情報化社会に対応しうる「大学図書館」としての機能の充実をはかるかということではないでしょうか。「頭一人…助一人…書写手廿人…使部廿人」（『令義解』）の末席を汚す図書館委員の一人として、「頭（館長）」の指揮の下、ささやかな努力を重ねて行きたいと思います。

「リベラルアーツの醸成は図書館から」

経営学部助教授　小　浜　ふみ子

近年、大学では学生に対して「本を読もう」との啓蒙運動が盛んである。若者の読書離れに危機感を覚える大人が多いことは事実である。ここでは、「若者たちよ、書を読んでまちに出よう。大人たちよ、若者にどんな本をどのように読むのか伝えよう」というメッセージを送ろう。メッセージの基底にあるのは、リベラルアーツの醸成である。リベラルアーツとは、専門教育に入る前の予備教育としての一般教育ではなく、「学問全体を貫いている哲学的な精神を喚起する」ためのものであり、アメリカの教育に照らしていうならば「人生の準備」「柔軟な心性」をもった人格形成を目標としている。

かつて私は、講義の中で小説を引用することがよくあった。例えば、『赤と黒』、『ヴェニスの商人』『若きウェルテルの悩み』、『セールスマンの死』、『ライ麦畑でつかまえて』等々である。ところがそれらはほとんど空振りだった。若者と接点がありそうな現代的な作家で、芥川賞・直木賞受賞作品を持ち出しても結果はほとんど同じだった。小学生の時から読まなければならない本は序列しており、大学生になればそれらの知識は共有されていると思い込んでいた私がうかつであった。次に、若者たちは映像の時代に生まれてきたのだから映画やビデオにあるものを使えばわかるだろうと考えた。『ゴッドファザー』、『マイフェアレディ』、『モダンタイムス』『クレイマー・クレイマー』、『シンドラーのリスト』、『ディア・ハンター』、『セブン・イヤーズイン・チベット』、『羅生門』、『生きる』、『八つ墓村』、『楢山節考』、『男はつらいよ』等々。しかし、残念なことに映像も図書に負けないくらい空振りだった。学生たちの多くは、読書の習慣も、映像へのアクセスもこれまでの学校生活の中で学習してこなかったし、友人関係のなかで交流する手段ともなりえなかったのだ。この傾向は本学だけではないようである。「わかりやすい本」を教えてほしいとの訴えは、他大学の学生でも同じである。

今時のレジャーランド化した大学の顧客学生は、コツコツと努力を重ねて必要な知識を学ぶことより、なるべく簡便に自分の要求に一致したデータ（即役に立つ）を手に入れようとする。ファーストフード的な「楽しみ」の追求が日常生活に浸透している若者たちには、読書による人格の養成など想像もつかないかもしれない。「マンガで読む～」がもてはやされている時代である。1年間に4万冊以上の新刊が発行され、インターネットでは地球の反対側の情報に即座にアクセスできる時代である。氾濫する情報をすべて獲得・消費することは不可能である。異常な過剰負荷環境（人間が処理できる限界を超える大量の刺激に囲まれている）に耐えるために人間は重要ではないと自分で判断した情報の入力を極力避けようとする。だが、時勢に任せておいていいのであろうか。

社会科学の古典を読むように勧めると、「ちょっと読んで分からなかったから」と諦めてしまう学生がいる。「訳者は50回以上読んでいるが、その

度に新たな発見があると述べているから、私たちが1度で分からないのは当然だろう」という私の顔をいぶかしげに見ている。学生の中には、「古典的教養は世の中に出てどのように役立つのかわからない」と尋ねる者もいる。私は「ワインのようにまず自分の中でゆっくり熟成させなさい。ワインの栓を抜いてひと呼吸して香りが立つまでテイステイングを待つでしょう。それと同じようにあなたがどのように生きるか考えるとき、あなた自身の考えや声となるまで待ちなさい」と真面目に答えるが、学生はますます困惑した顔になってしまう。しかし、講義を進めていくうちに、「ああ、そうなんだ！」とある文脈を捉えて面白味を得た学生は最後まで読み通し、次には自分で挑戦するべき文献を見つけてくる。

ところで、学生たちは自分たちの読むべき本の指針が示されなかったことに対して不安も抱いている。学生たちは、こう指摘する。教育制度の「ゆとり」が「ゆるみ」につながっている、「個性を活かす」教育が結果として「個性のない人間」を生んでいると。教育と社会構造との関係を問う答案には、「自由に、主体的に学べという教育方針はやめてほしい。必要とされる基礎知識ははっきりと示してほしい」との声も少なくなかったことを加えておこう。

教員たちは、「自分の好きな本を自由に読め」ではなく、最初は入門書やガイドブックではなく、難しくても「原典を読みなさい」と伝え、次にはこれと体系的な勉強を支援するような読書を勧めるべきである。小人数教室では、「眼光紙背に徹する」ような読み方を教えることも可能だろう。それと同時に、ブラウジングで思いがけない本を見つけたこと、当たり外れがあったこと、珍しいビデオを発見したこと等自分たちの図書館遍歴を積極的に伝えよう。図書館には、分野ごとの基本文献や新入生向けの文献コーナーを設けてもらうのはどうだろうか。よく利用され、人々の交流の場にもなっている公共図書館は施設の充実もさることながら、職員や熱心な利用者層が、人々の文化的コミュニティを創る仕掛けを常に考えていることを付言しよう。

西條八束・紀子　スケッチ展

長白山瀑布　　西條八束

アンスリウムが咲いた　　西條紀子

私のフィールドワーク

現代中国学部教授　高　橋　五　郎

文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物……という厳かにして気品漂うものをお借りするには気が引けるが、筆者の専門であり趣味でもある海外フィールドワーク（国際社会調査）についてふれてみたい（なお、参考にならないと思うがついでに蛇足すれば、「国際社会調査」なる用語は他ならぬ私の造語である）。

宮本常一は日本全国をカメラ担いで隈なく歩き、一生を農山漁村調査で送った稀有の旅人である。宮本の足元には遠く及ばないが、筆者も、一応、北から南まで47都道府県を歩いた。これが今の中国調査や東南アジア調査に役立っている。中国は日本の24倍の国土面積をもち、多様な風土と自然が人びとの生活の基礎となっている。東南アジアもまた、南シナ海（海というよりも海洋湖といった方がふさわしい）を囲むように多くの国々が輪をなして連なっている。

日本はこれらに比べれば、面積も狭く、風土も均一で人びとの生活も単調なように見える。しかし、皆さんは経験があるだろうか。日本でも、地元民の通訳なしでは、会話によって意思疎通することができない場合があることを。私は新潟の田舎の生れで、言語は東北弁と変形した上方弁まじりの新潟弁で育った。子供の頃の10年ほど、村上市という鮭料理で有名なところで生活したが、此処は奇妙な言語を使うところで、普通の新潟弁とはまったく違っていた。したがって少々の方言には対応できる経験を自然に積んできたつもりだが、農村調査をするようになって、東北のある県の農家を訪れたときのこと、その家の主人の会話がまったく聞き取れず、私と会話できる地元民に通訳を頼んだ記憶がある。その調査会話はいまでもテープにとってあるが、日本語とは思えない難解さである。方言に限らず、この日本には実にさまざまな文化や生活、慣習や伝統があり驚くことが多い。

この体験は、日本でさえ、想像のつかない多様性をもつことが多いのだから、ましてや人種・民族と複雑な宗教事情、貧富の差や身分上の序列がいまなお幅をきかせている海外では、見たもの、聞いたものつまり調査したものを一般的と決めつけたり、安易に普遍化することはできない、といういましめを与えてくれることになった。

宮本は一生を日本の調査の旅に費やしたが、かれは普遍化できることはなにかを探しながら、結局行く先々では、そこにしかない特殊性を知る連続ではなかったか。そしてそれが、調査を続けるエネルギー源となったのではないかと思う。調査は多くの場合、初めての地で新しい発見をすることであるが、そのときの快感は経験者にしか分からないだろう。つまり、普遍性というのは一種の幻想であり、青い鳥に似ているということだ。青い鳥を発見しようと歩く毎日から、その目的を忘れさせるほどの面白さが積みあがっていく。これが調査であるまいか。

私の海外調査の場合も、こんなことをいつも心の片隅においている。そして調査の面白みがもっともよく実感できるときは、長いあいだ探していた資料が見つかったときである。また、探していた資料以上の、自分にとっては未知だった資料の存在とその実物に出会ったときである。資料探しは読みたい古書を探すことにも似ているが、決定的な違いは、古書には、リスト表やネット販売があって、必ずしも足で探し歩く必要はない。ところが、資料にはリストがない、ネット販売などあるわけがない。現地へ行くしかないのである。そして重要なこと、それは資料探しに現地の友人や知り合いの協力、伝手が欠かせないことだ。

ある資料を探していたときのことである。自分が探している資料を現地の知り合いと話していると、彼女は、「その資料なら、どこそこへ行ってみれば何か見つかるかもしれない」と助けてくれる。そして、1日をつぶすつもりで、事前にアポをとり、教えてもらったところへ行く。そこには確かに、参考になる資料、古い写真や新聞記事、関連する図書などはあった。しかし本命はない。とはいっても、せっかく来たのでさまざまな資料に当り、少しでも役に立ちそうな資料を漁る。その様子を見ているそこの人が、成果は上がったかと聞く。こちらは参考になったが、十分ではないなどと会話を交わし始めると、親切にも、「あなたが探しているものなら、ここへ行ってみなさい」などと、別の助言してくれるのだ。

このようにして、本当に探していた資料がやっとの思いで見つかることがある。ときに書写し、ときにコピーを許される場合もあるが、その日の夕方は満足感で一杯になる。が、これはうまくいったほうで多くの場合は、青い鳥探しに終わることが多い。それだからこそ、想いが遂げられたときの快感はまことに筆舌に尽くしがたいものになる。

「中国現地調査」厦門（アモイ）の訪問家庭で

しかし、いい資料に接しても持ち帰ることができないことも多い。中国の農村にはコンビニになどといったものはなく、村民委員会や古ぼけた看板が時代を語る信用合作社などで見つけた資料をコピーすることはできない。そこで、筆写となるが、はかどらない。このように、持ち帰ることができるのはほんの一部だけという場合もある。

次には、資料をどう読むか、という作業が待っている。私は、社会科学研究者にも勘や物語風に資料を読む力が必要だと思っているので、資料を読むときは、農民や華僑を主人公にして、資料が語る物語を想像することにしている。このやり方は勝手な決め付けや読み違いを招く危険性もあるが、学問とは、人間の物語を経済学的に語ったり、法学的に語ったりしているだけだと思っているので、物語に仕立てる方法は有効だと思う。これは私のやり方なので、否定したい方はどうぞ。

いまの私の課題は、集めた資料を物理的にどのように整理し、保存するかということである。例の「超整理法」云々、あれはいただけない。実践したことがない、素人の空想的整理法であり、実際には不可能なことが多い。そもそも、資料のだれもができる最良の整理法などない。資料整理の方法は、学問の仕方に関する個性を反映するものであって、これを否定した整理法は、厚さの順に書架に本を並べる図書館のようなものである。

米国における「東亜同文書院大学」と愛知大学の「中日大辞典現象」

経済学部助教授　李（り）　春利（しゅんり）

一、訪米の経緯

東亜同文書院大学（1901年設立）を源流にもつ愛知大学の中国研究は「第二の世紀」に入った。「第二の世紀」の幕開けの象徴は2002年の文部科学省21世紀COEプログラムの採択による愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）の発足である。2001年の東亜同文書院百年祭が20世紀を締めくくったとするならば、2002年のICCS発足は21世紀への発進にほかならない。

私はたまたまICCS推進委員会のアメリカ部会に入っているので、米国の中国研究の拠点校と研究交流のネットワークを構築するために、2003年にICCS事務局長の山本一巳教授と一緒に2回にわたって、米国の主要大学を訪問した。

1回目は3月13日から3月22日までで、アメリカ西海岸のカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）、UCバークレイ校，スタンフォード大学、ワシントン大学とハワイ大学を訪問した。2回目は9月7日から9月18日までで、中西部のミシガン大学とシカゴ大学、東海岸のプリンストン大学とハーバード大学を訪問した。

二、ミシガン大学＝全米初の「東亜同文書院大旅行誌」収蔵

今回の訪米で、予期せぬ発見ができた。それは、愛知大学とその前身校である東亜同文書院は米国でも広く知られていることである。

例えば、米国アジア研究の重要な拠点校であるミシガン大学のAsia Libraryは、中国書・日本書コレクションは全米最大級の一つである。2003年、ミシガン大学Asia LibraryはUCバークレイ校と競って日米教育関連の基金会から助成金を勝ち取り、「東亜同文書院大旅行誌」マイクロフィルム版を収蔵した。同大学日本書コレクション館長のKenji Niki（仁木賢司）氏によれば、「東亜同文書院大旅行誌」の収蔵は全米初であるといわれている（写真１）。今後はさらに「中国調査旅行報告書」も収蔵する予定である。

東亜同文書院生の大調査旅行は、5期生から始まったといわれている。例えば、1906年の大調査旅行に参加した書院生は、中国切っての日本留学奨励派、洋務運動の推進役である湖広総督・張之洞（『勧学篇』著者）や両江総督・端方を訪問し、歓迎と協力を受けるなど、その出発点の高さが窺える。1コースは3ヶ月間、総計700コース、約5,000人の参加による40年間に及んだ大調査旅行（The Great Journey）は、世界中の大学や教育機関を眺めても、これほど徹底した組織的なフィールドワークはないと言っても過言ではない。その範囲も中国大陸のみならず、東南アジアやモンゴル、遥かシベリアにも及んでいた。

これらの調査記録をまとめた「大旅行調査報告書」（The Reports of the Great Journey）は、満鉄調査部資料と並んで、20世紀前半の中国社会経済に関する貴重な第一次資料であり、双璧を成し得る存在である。調査の目的や背景などは違うものの、徹底した実証主義と実地調査に裏付けられたこれらの調査資料が、アメリカや欧州を含めて世界的に高い評価を得ているのは、その価値からして当然である。満鉄調査部資料は世界的に評価され、欧米の一流大学の図書館に収蔵されているが、それと並ぶ重要性をもつ世界的な中国研究史料「東亜同文書院調査報告書」の研究・発掘はまだ発展途上にある。

この世界的な文化・研究の遺産の発掘・研

究・出版を強化し、国際的な視野でそのブランド価値にふさわしい形で世界に還元することは、愛大の重要な戦略的課題である。それは同時に愛大の国際的知名度を「形」にして、大学のアイデンティティを活かしながら内外におけるブランド力を形成するという意味で、今後大学間の厳しい生存競争に勝ち抜くための戦略的な切り札にもなりうる。

三、研究法としての大調査旅行と「地域研究」

東亜同文書院の独特な研究教育方法と戦後米国発の有名な「地域研究」(area studies)との関係に注目した米国の研究がある。

「東亜同文書院の大旅行を軸とした地域研究・フィールドワーク教育方法は、ジョージア州立大学のDouglas Reynolds教授（第4回東亜同文書院記念賞受賞）が喝破したように、第二次大戦後発展したアメリカの地域研究よりも遙かに早い時期に（半世紀—引用者)、しかも内容においてもアメリカに劣らない優れた教育方法であった。」(滬友会HP＝http://koyukai.hp.infoseek.co.jp/)

「(氏は）東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し、『地域研究の知られざる起源：日本の東亜同文書院』を刊行して広く世に紹介した。また戦前の日中両国の間に19世紀末から20世紀初めにかけての10年間、黄金の10年ともいうべき日中蜜月の一時期があったこと、その形成に東亜同文会及び東亜同文書院があずかって大いに力があったことを論証し、著書『新政革命』(英語版及び中国語版）により広く世に紹介した。」(東亜同文書院基金会HPより、同上)

地域研究の源流は、第二次世界大戦後、ハーバード大学のJohn King Fairbank教授を中心とする「地域研究」グループによって開発された有名な研究法にさかのぼることができる。複数の研究分野を跨る学際的な(interdisciplinary）研究が最大の特色であり、戦後アメリカにおける中国研究と発展途上国研究の水準が飛躍的に引き上げられたといわれている。

愛知大学名誉教授・元学長の牧野由朗先生によれば、1970年代中頃、Fairbank教授は愛大に招かれて講演したという。当時の講演テーマは中国の近代化（modernization）についてであり、自分も質問したと記憶されている。

2002年、COE・ICCSの申請・発足にあたり、研究拠点リーダーの加々美光行教授の問題意識の根幹をなしているのは、まさにこの地域研究の限界を克服し、新しい中国研究の方法を模索・確立することであった。

四、「中日大辞典現象」

約250年の歴史をもつプリンストン大学の美しいキャンパス・センタービルの3階に、かつてアルベルト・アインシュタイン博士が教えていた教室（302号）がある。この「アインシュタイン教室」と同じ階の反対側に、プ

ミシガン大学所蔵の東亜同文書院大旅行誌マイクロフィルム版（写真1）

プリンストン大学東アジア図書館所蔵のぼろぼろの中日大辞典（初版）（写真2）

リンストン大学東アジア図書館がある。その中の一角で、私は中日大辞典を発見した。収蔵されているのは1968年に出版された中日大辞典の初版である。辞書は相当使いこなされており、本体はかなり傷んでいる(写真2)。「ご苦労さま」と言ってあげたいぐらいだった。

東アジア図書館副館長のMartin Heijdra博士によれば、愛知大学といえば、すぐ『中日大辞典』が思い浮かぶという（この評価は中国でもまったく同じである）。彼はオランダ人で、同国の中国研究の名門校・ライデン大学の出身で、プリンストン大学で博士号を取得した後に、ここに勤めるようになった。彼の専門は中国研究であるが、中日大辞典を使って日本語を覚えた。ライデン大学では、東アジア研究の専門であれば、中国研究の専攻でも日本語が必修であるという。

Harvard-Yenching Libraryで山本一巳教授とRonald Suleski博士（写真3）

また、館長のTai-loi Ma博士はもともとシカゴ大学で長く勉強し、仕事をしてきた。彼が学生の頃、米国での東アジア研究は中国語と日本語両方の習得が要求されていた。日本ベースの中国研究の成果を読むために、日本語が必修である。そのために、中日大辞典は広く使われていた。中日大辞典自体大変素晴らしい辞書であるが、当時はそれしかなかったという。

プリンストンのほかに、今回訪問したミシガン大学、ハーバード大学燕京図書館（Harvard-Yenching Library）でも、中日大辞典が発見された。ハーバード燕京図書館では中日大辞典第2版が収蔵されていた(写真3)。ハーバード大学フェアバンク東アジア研究センター長のWilt Idema教授も中日大辞典を愛用していた。

中日大辞典が刊行された時の世間の評価は高く、朝日ジャーナルや毎日新聞は「この辞典の出版によって、日本は中国語に関しては世界の学界に誇り得る金字塔を建てた」と絶賛していた。欧米の大学では東アジア研究専攻の学生に向けて、カリキュラムの中に中国語と日本語両方を必修科目として組み込まれており、時代に先駆けて発行された『中日大辞典』はこのように構造的に広く使われていた。中日大辞典が日中両国を越えて、広く世界的に使われてきたこの現象を、ここであえて「中日大辞典現象」と呼ぶことにしよう。

五、愛大の中国研究戦略＝世界的なブランド形成に向けて

愛知大学と東亜同文書院大学は過去100年間にわたり、20世紀の日本における中国研究をリードしてきた。それはわれわれ当事者の認識を超えて、中国だけではなく、欧米でも高く評価されている。愛大はもっと自信を持ってもよさそうである。

中国研究の「第二の世紀」に入ったいま、愛大は世界的な視野で東亜同文書院大学記念センターおよびそれに関する研究の戦略的な位置付けを再考すべき時期に来ている。つまり、記念センターに展示機能だけではなく、研究支援機能を付加して、文科省を含めた内外の競争的研究資金の獲得や戦前の関連名著のリフレッシュ発行（例えば、オンデマンド印刷技術で）などを視野に入れて、国際ネットワークの中で東亜同文書院大学の世界的なブランド価値を再認識すべきである。それが愛大のブランド形成につながるもので、ひるがえって日本国内での知名度と競争力の向上にも貢献できる。

COE・ICCSは20世紀後半の現代中国研究の世界的な研究拠点を目指しているのであれば、東亜同文書院大学記念センターは20世紀前半の近現代中国研究の世界的な研究拠点の形成を目指しても良いのではないか。それが21世紀愛知大学の中国研究の両輪をなすものである。

タイ語資料の宝の山っ!!

国際コミュニケーション学部助教授　加　納　　寛

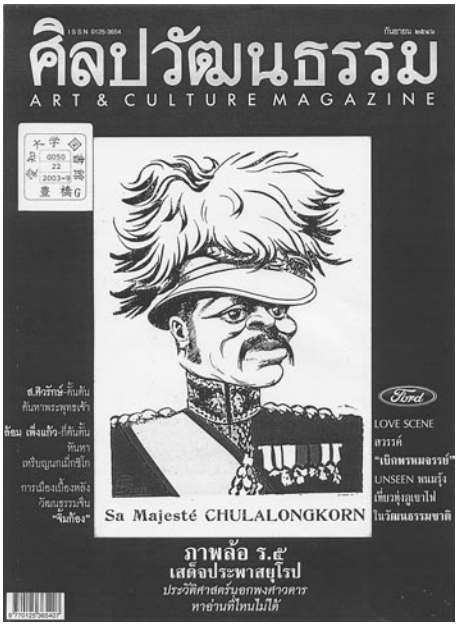
私は「タイ語の先生」です。赴任当初は、よく「体育の先生」や「太鼓の先生」に間違えられました。最近、こうした間違いがなくなったのは嬉しいかぎりです。なぜなら、愛知大学におけるタイ語教育が認知されてきた結果だと思えるからです。

実は!!（ここにビックリ・マークを使うこと自体、前の段落を否定するようなものだけど)、愛知大学は、タイ語を第2外国語として教えている、中部地方においてはきわめて珍しい大学なのです!!（力説っ!!）

ということで、愛知大学にはタイ語関係の書籍や資料が、日本でも有数の規模で収められているのでした（そもそもタイ語資料を恒常的に購入している日本の図書館は数少ない)。今日は、それらの宝物♥のうち、図書館に収められているものを紹介します（ほかに、LL自習室にも、書籍やビデオ・テープをはじめ、多くの資料があります。こちらについてはLLニュースを見てくださいネ)。

なんといっても愛知大学の図書館の嬉しいのは、タイの日刊紙が入っていることです。ほんの数日の遅れで、政治から猟奇事件（なぜかタイの新聞は、猟奇事件関係にやけに熱心です）にいたるまで、タイの毎日の動きがわかるのは、タイを研究・学習する者やタイ語を学ぶものにとってありがたいことです。確かにインターネットでも事の概略は追えるのですが、紙面で詳細に事件を見ていくのとは深みがちがいます（私は旧人類？)。タイの日刊紙「タイラット（Thai Rat:ไทยรัฐ)」は、最新のものを1階の新聞架で、同じ月のものを1階奥の新聞棚で、古いものを第2書庫で、それぞれ見ることができます。インクの香りをかぎながら（タイの新聞は、なぜか濃厚なインクの香りがするので、意識しなくても匂いをかいでしまう）タイの新聞を広げる…　そこに広がるプチ・タイの世界…　すばらしい一瞬です。

しかーーーし!!　そうした甘い一瞬を打ち破る危険が、タイの新聞には満ちているのでしたっ。本学が購読する「タイラット」は、タイで最高の発行部数を誇る新聞です。ということは、タイの「大衆紙」です。ということは、記事のノリがスポーツ新聞的になっているのです。ということは、なぜか第1面に、身体表面の被覆率がきわめて低い人物の「あられもない」カラー写真が、でかでかと掲載されてしまっていたりするのでした。そしてまた、前に書いたように猟奇事件関係にやけに熱心なため、飛び降り自殺した人の生前の姿と飛び降り後の姿が、美容広告の使用前・使用後の感覚で並べられていたり、焼死体



までがカラーで第1面に載っていたりしてしまっているのでした。甘い一瞬は見事に打ち砕かれ、こうした写真がまわりの人々に気づかれていないのを横目でチラチラ・ヒソヒソと確認しながら、第1面を隠して第2面から読んでみたりするのでした。時として、前の座席で勉強していた人が、憐れむかのような目で、そして危険なものでも見るような目で私を見るとき、タイの新聞に宿るこの危険性に身震いしてしまうのでした（ちなみに当然のことながら、「高級紙」や「ビジネス紙」では、こうした危険はありません）。

また、こうした新聞が蓄積されていくのも愛知大学にとって貴重な財産となっています。ちょっと昔の事件について調べたい時に、この蓄積はきわめて有効です。書庫で、ある事件を報じる記事を2週間分まとめて読んでいくとき、愛知大学にいることの幸せを感じるのです。新聞の蓄積性も、インターネットでは入手できない情報となっています。愛知大学にタイ語教員が配置されるより以前の（すなわち「タイラット」が購入されるより以前の）新聞については、マイクロ・フィルムの日刊紙「マティチョン（Matichon: มติชน）」が入っています（本当は「タイラット」を購入すべきですが、「タイラット」はマイクロ・フィルム化されていません）。これにより、1970年代から現在にいたるまでの範囲であれば、日刊紙レベルで新聞記事を追うことが可能になっています。

マイクロ・フィルムとしては、今後、タイ政府の官報（Ratchakitchanubeksa: ราชกิจจานุเบกษา）を揃えていく予定でいます。官報には、当然タイ国の法令をはじめ貴重な情報が記載されるので、タイ研究について貴重な情報をもたらしてくれるものと期待しています（タイの国立図書館では、司書さんに申し出ると、古い官報を見ることができます。でも、見てるうちに紙が崩れてきます（わかります？）。コピーでもとろうものなら、コピー機の周りにさっきまで官報だったものの破片が飛び散ります。私の予想では、そのうち古い官報のコピーは禁止されるでしょう。タイの大学図書館の中には、官報のマイクロを収めている図書館もありますが、コピーをとるのは結構面倒で時間がかかるうえ、コピー経費もガッポリとられます）。

このほか、タイの雑誌も、続々と（雑誌なので「続々と」入るのは当たり前ですが）愛知大学図書館の蔵書に加わっています。こちらはどちらかといえば「高級感」ただよう雑誌が中心なので、日刊紙タイラットに潜んでいるような危険性は孕んでおらず、安心して広げることができます。たとえば、「シンラパ・ワッタナタム（Sinlapawatthanatham: ศิลปวัฒนธรรม）」は、タイの芸術・文化愛好家たちの雑誌です。「ムアン・ボーラーン（Muang Boran: เมืองโบราณ）」も同じですが、より考古学色が強いものです。「オー・ソー・トー（O.S.T.: อ.ส.ท.）」は観光雑誌です。タイを旅する気分にひたりたいとき、開いてみるととても幸せです。この雑誌には付録の観光ガイド小冊子がついています。コピーして旅行に持っていくと便利ですね。「マティチョン・スット・サップダー（Matichon SutSapda: มติชนสุดสัปดาห์）」は、いわゆる高級日刊紙「マティチョン」の週刊版です。政治の動きなど、日刊紙より深く分析されているので、目を通しておくとよいでしょうね。

このように、愛知大学図書館は、日本における数少ないタイ語資料の宝の山（の一つ）です。ぜひ皆様にも、タイ語を学んでいただいて（巷で思われているほど難しい言葉ではありません！！）、これらの資料を活用していただきたいものです。愛知大学の得意とするアジア研究の一環として、本学がタイ研究の全国的な拠点となるようにタイ語資料を揃えていっていただければ、愛知大学に在籍するタイ研究者としてこれにまさる喜びはありません！！（キッパリ）　今後とも皆様のご理解とご助力を願う次第であります。（ペコリ）

冬の街灯

国際コミュニケーション学部大学院
夏目 晶子（しょうこ）

図書館ご利用の皆さん、こんにちは。忙しかった秋セメも終わり、ふと寂しさを感じる時、私はよく図書館を利用します。失われかけた私自身に新しい自分らしさを探すように、図書館で本を探します。寒さが身に応えるとき本は私に情熱を与えてくれます。

今はもうすっかり冬。私は現在、大学院国際コミュニケーション研究科コミュニケーション専攻の修士課程1年に在学しています。大学院の魅力は私自身が興味を持った事柄つまり研究テーマを自分で絞り込んで徹底的に追究できるというところに有ると思います。学部生で例えるとしたなら、毎時間がゼミ（演習）の時間であるという事になります。しかも、毎時間がレポーター（報告者）といった感じです。ですから、ひとコマひとコマの授業が大変充実しています。皆さんもレポーターの経験がおありと思いますが、レポーターは資料をしっかりと集めなければなりません。

資料検索には図書館は欠かすことは出来ません。以前の検索方法は検索カード方式だったんですが、現在では読者の皆さんも御存知の通りパソコンで簡単に検索出来ます。キーワードで検索出来ますので大変便利になりました。分からない時はやさしいレファレンスの方が親切なアドバイスをして下さいます。読者の皆さんも困った事が有りましたら、私のように気軽にレファレンスの方に聞いてみて下さい。図書館のイメージがすごく膨らむと思います。

私は現在、民俗学を専門に勉強しています。テーマは中華人民共和国の衣装の紋様です。この図書館には中国関係の資料が大変豊富に所蔵されています。こんなところにも愛知大学が大変中国との関わりが強く、また中国研究に情熱を注ぎ込んでいることが感じられます。私もこれらの礎になれればと頑張っています。

独りで迷っている時、図書館のドアを叩いてみては如何でしょうか。きっと心の暖炉があなたを迎えてくれるでしょう。

私と本と図書館と…

現代中国学部　村上 真理

本がとても好きだったらしいです…。母に聞いた話なのでよくは覚えてないのですが、私は小さいころから絵本や小説が大好きだったそうです。寒い冬の夜に、母の手がかじかむまで本を読んでくれたことは不思議と覚えています。毎日のように昼は祖母に、夜は母に本を読んでもらっていたので私自身が本を自然に好きになったのはある意味当然の成り行きだったのかもしれません。母が公民館兼営の図書館に初めて連れて行ってくれたのが「いつ」だったのかというのは…実はあまり覚えていないのです。

小さな図書館でした。
難しい本よりも、むしろ児童向けの本が多くそこにはおかれていた記憶があります。普段はあまり人気（ひとけ）のない図書館で『不思議の国のアリス』や『ナルニア国物語』その他の児童文学を気ままに読んでいた私でしたが、中学、高校のテスト期間が近づいてくると、小さな図書室の机は中学生や高校生の「おにいさん」「おねえさん」でいっぱいになり、そのときばかりは自分が読んでいる物語よりも鉛筆の音や、単語帳をめくる音が耳につき、自分の居場所のひとつがなくなってしまった気がして、そそくさとその小さな図書館を後にしたものです。

その憂鬱な時期、私が一つの楽しみにしていたのが「移動図書館」でした。聞いたことがある方はいるでしょうか？私の町では、大型のワゴン車の中に本棚を入れてそこに本をぎっしり詰め込んだ「移動図書館」が各区画の公民館に定期的に来ていたのです。私の母はそのころ公民館で事務の仕事をしていましたから、中央の公民館から連絡が入るとそのことを町内の放送で流すんです。小さな町の公民館ですから、放送を入れるのも母かもう一人の事務員さんでした。私は母が、よくとおるきれいな声で移動図書館が来ることを告げるのを聞くと、なんだかわくわくしたものです。

今、私はもう大学生で、愛知大学の名古屋図書館で学生アルバイトをしています。本好きな私には適職だと思います。ここは私が今まで過ごしたどの図書館よりもはるかに大きくて、初めて来た時には迷ってしまいました。（今は隅まで案内できますヨ！）しかし、図書館にいると時折懐かしく思い出すのです…。小さな図書館と、もっと小さな移動図書館のことを…。

シリーズ研究所紹介　その④

中部地方産業研究所長　福　井　幹　彦

中部地方産業研究所（以下中産研）の研究活動について、この紙面を借りて中産研の今年度の主な共同プロジェクト研究について簡単に紹介させていただく。

大学の付属機関である研究所は本来学際的な共同研究がふさわしいと考え、1996年より中産研の研究活動は受託研究、研究所予算ともに共同研究を原則として今日にいたっている。今年度は4本のプロジェクトがある。

プロジェクト（1）は「地域経済共同プロジェクト研究」で責任者は伊藤靖徳教授である。この共同研究には①愛知県内企業の海外展開に関する調査と②本学OBを中心とした企業・起業経営者、地方行政首長などの聞き取り調査を予定している。（1）-①に関しては、この8月にアンケート調査を行い、現在データ入力・集計を当研究所で実施し結果の分析に入っているところである。年度内に研究発表・公開シンポジウムを計画している。

長野県新野にて調査員（学生）と共に

プロジェクト（1）-②については、企業経営者と行政首長の聞き取り調査を予定している。この聞き取り調査に際しては、担当所員のゼミナールの学生も同行させ、学生にも聞き取り、質問する機会をもうけ参加させることも計画している。この内容は2003年度年報「中部の経済と社会」に初企画として掲載することにしている。

次にプロジェクト（2）は「中部と東アジア共同プロジェクト研究」（2年継続）責任者樋口義治教授で、今年度は日本・韓国・中国の「大学生の起業家などに関する意識調査」を企画した。調査に協力した日本の学生は、愛知大学豊橋キャンパスの経済学部を中心とした学生諸君と、東京、長野、四国の社会科学系4大学の学生諸君である。韓国はテグ地域の社会科学系大学の学生諸君であり、中国は北京、西南、福建、南京の主として社会科学系大学の学生諸君である。調査票数は日本1291、中国1255、韓国479である。

そしてプロジェクト（3）は「国際共同シンポジウム」（2年継続）責任者福井幹彦は、さきのプロジェクト（2）とリンクしてこの日中韓の大学生の起業家などに関する調査結果をもとに年度内には中国、韓国の研究者の参加を得て、国際共同研究シンポジウムの開催を計画している。

最後のプロジェクト（4）は「三遠南信地域におけるソーシャル・キャピタル等に関する共同研究プロジェクト」（2年継続）責任者岩崎正弥助教授である。この共同プロジェクト研究は1996年より「山間地域の自立・内発的発展とネットワークの可能性」をキイ概念として以後8年間継続して今日に至っている三遠南信地域の主として中山間地域をフィールドとした共同研究である。

このわれわれの中山間地域をフィールドとした共同プロジェクト研究の特徴は、共同研究者に学外の人々、ここでは市町村の行政マンや市町村民の参加である。つまりここでの共同研究は、産官民学による共同研究であり、中産研における研究方法としての共有財産であると自負している。さらに今年度は聞き取り調査の調査員に岩崎ゼミ、福井ゼミのゼミ生を起用してみた。この「ゼミ生の参加によるフィールドワーク」は今後の中産研の共同研究に積極的に組み入れていきたいと考えている。

プロジェクト（4）-①の岩崎チームは中山間地域の過疎村のソーシャル・キャピタルの確認と育成を地元住民とのワークショップを通じて試みるという新しい研究を本年度は豊根村（愛知県）、売木村（長野県）で実施し、今年度の成果は、売木村のご要望もあり、年度内に同村にて村民の皆さんの前で研究発表とシンポジウムを開催する予定である。

三河ふみくら道しるべ❶

西尾市立岩瀬文庫

現代中国学部助教授　木　島　史　雄

床の間にかけられた掛け軸は目にしたことがあっても、あれを横たえて書物にした巻物を見たことのある人は少ないであろう。ましてそれを手にして、その使い勝手を考えてみた人など、ごくまれであるに違いない。しかし、我々が書物を読む際、実際に手や目に触れるのは、抽象的な「文章」とか「文学」ではなく、大きさと色と形と重さを持ったモノとしての書物である。そして、文章そのものは同じでも、接する形態が異なれば、それらは異なった意味合いを帯びてくる。これは、「読書の文化史」と呼ばれる人文学研究の新しい視点であるが、そんなことを気軽に、しかも切実に感じさせてくれる場所がある。

お茶の産地として有名な西尾市の「岩瀬文庫」がそれである。図書館としてのみならず、昔のスタイルの書物に触れるという体験をとおして、書物の歴史をたどれる博物館として、今年4月にリニューアル開館した。

展示室に入ると、最初には、年代の明らかな世界最古の印刷物の一つである百万等陀羅尼、重要文化財指定の後奈良天皇筆「般若心経」などが並べられている。壁面には、東洋で生み出された様々な形態の書物が、展示・解説されている。巻物やお経もあれば冊子もあり、手書き本もあれば木版印刷本も活字印刷本もある。活字本と木版本の見分け方の解説もあれば、故紙を再利用した紙背文書も並べられている。さらに次の部屋にはそれらの複製があって、実際に手に取ることができる。巻物型の書物で、終わり際の文字を見ることがいかに手間のかかることなのか、ページ付けのない本がいかにのっぺりとして扱いにくいモノなのかといったことが、ここでは自分の手と目で感じられる。印刷や活字についての博物館は他にあっても、書物の歴史全体を理解できるよう工夫された施設は世界でもまれである。

この岩瀬文庫は、私立図書館としてスタートした。同地出身の岩瀬弥助は肥料商から一代で莫大な財をなし、明治41年（1908）、全くの私財でこの文庫を設立した。壮大なプランのもと、閲覧室はもとより、講演会用の会堂、読者のための宿舎、周囲には果樹・池水までもうけている。富商・財閥旧家がやったような、すでにある貴重書や骨董を保存維持するためではなく、市民への公開と利用を目的とする図書館が、ここに一個人の手で設立されたのである。名古屋にもまともな図書館がなかった当時、私立であるかどうかを問わず、岩瀬文庫は、東海圏で最も充実した図書館であった。図書の購入も積極的にすすめられ、新刊書を網羅的に購入するとともに、全国各地から貴重な書籍を集めている。集書のため弥助は、年末には札束を懐に、東西の古書街を回ったという。京都からは、公家柳原家や本草家山本亡羊の旧蔵書を一括して購入。いっぽう市内寺津八幡の神主渡辺政香の蔵書をはじめとして、郷土資料も熱心に収集している。前者には、現存最善本として各種翻刻本の底本とされる『枕草子』、後者には三河地方の一大資料集『三河志』の著者自筆稿本などがあって著名である。また山本亡羊の蔵書を得て、動植物学である本草学に関わる書物も特に充実し、中国・朝鮮で出版された書籍、日本の禅宗寺院で刊行された五山版なども豊富にそろえ、東洋の書物の歴史を概観できる構成となっている。

岩瀬文庫は、何か特定の閲覧目的の図書が無くても、ちょっとした好奇心と学術や歴史への関心があれば、知的刺激を受けて十分に楽しめる施設である。

所　　在：西尾市亀沢町480番地
電　　話：0563-56-2459
開館時間：午前9時～午後5時　基本的に月曜休館
交　　通：名鉄西尾駅下車　タクシー 10分または徒歩20分
詳細はホームページで
http://www.city.nishio.aichi.jp/kaforuda/40iwase/

編集・発行　愛知大学図書館　2003年12月17日発行　No. 28

■豊橋図書館　〒441-8522　豊橋市町畑町字町畑 1－1　☎(0532) 47－4181
■名古屋図書館　〒470-0296　西加茂郡三好町黒笹 370　☎(0561) 36－1115
■名古屋車道分館　〒461-8641　名古屋市東区筒井二丁目 10－31　☎(052) 937－8116
URL　http://library.aichi-u.ac.jp